



大阪市立大学大学院・創造都市研究科ワークショップ

「デジタル情報社会における学術情報」に参加して

大綱 浩一

「デジタル情報社会において学術情報のあり方やその流通は大きく変化しつつある。デジタル化・ネットワーク化によって、膨大な資料に直接アクセスできる機会が増えた一方で、デジタル資料の組織化、機関リポジトリの構築、「所蔵からアクセス」というパラダイム・シフトへの対応など、多くの課題が山積されている。」として、次の2つの発表と、発表者の2氏に赤澤久弥氏(滋賀医科大学)、天野絵里子氏(京都大学)、進藤達郎氏(滋賀大学)を加えた5氏によるパネルディスカッションが行われた。発表の概要は下記のとおり。

- ・竹内比呂也氏(千葉大学)「デジタル環境下における学術情報流通体制の変化」
- ・加藤信哉氏(山形大学)「電子ジャーナルの利用統計と評価」

■竹内比呂也氏「デジタル環境下における学術情報流通体制の変化」

シリアルズ・クライシスからビッグ・ディールへ：1960年代から70年代にかけて出版社が学術出版を主導するようになり、学術雑誌が非代替商品であったことから特定出版社による市場の寡占化が進み、価格の高騰と図書館予算の縮小が相まって、シリアルズ・クライシスが発生した。デジタル環境下において、シリアルズ・クライシスへの対処策として、ビッグ・ディールと呼ばれる学術雑誌契約モデルが登場したが、科学コミュニケーションの形態は本質的に変化しておらず、「査読」制度による質のコントロールを背景に依然、出版社主導による学術情報流通体制が続いており、シリアルズ・クライシスも本質的には解消されていない。といった説明があった。

(次頁へ)

[目次]

大阪市立大学大学院・創造都市研究科ワークショップ「デジタル情報社会における学術情報」に参加して	…	1
続京大図書館史こぼれ話 第四回	…	2
第37回全国大会のご案内	…	4

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

オープンアクセスとオープンアクセス雑誌：(1)オープンアクセスの展開、(2)オープンアクセスを巡る政策的動向(アメリカ：下院歳出委員会、イギリス：下院科学技術特別委員会、日本：第3期科学技術基本計画など)、(3)オープンアクセス実現の方策(オープンアクセス雑誌と機関リポジトリ)について説明があり、(a)「学术论文への障壁なきアクセス」を実現するため、出版社主導の学術出版に対抗し、オープンアクセス雑誌が刊行されたが、学術雑誌の非代替商品性のため、購読しなければならないタイトルが増えただけであった。

そして機関リポジトリ：機関リポジトリの(1)概要、(2)役割(オープンアクセス、と大学からの情報発信)、特徴(永続性と安定性)、(3)現状(まだ情報量が少ない、コンテンツに対する認識にばらつきがある、自発的登録の停滞)、機関リポジトリに対する(4)出版社/学協会の態度(拒絶から容認へ)について説明があり、(a)学術雑誌は「査読」に支えられており、その地位は全く揺らいでおらず、オープンアクセスもシリアルズ・クライシスの解消には至っていない、(b)機関リポジトリは当面増えていくと思われる、安定的な登録体制の確立が急務である、とのコメントがあった。

■加藤信哉氏「電子ジャーナルの利用統計と評価」

電子ジャーナルの概要：(1)刊行中の学術雑誌 43,500 タイトルのうち、オンラインで利用可能な雑誌は 14,600 タイトルである。(2)国立大学では外国雑誌購入経費に占める電子ジャーナル経費の割合は 2002 年以来年々増加してきている。といった解説があった。

電子ジャーナルの利用：コンソーシアム形態での利用事例としてアメリカの OhioLINK とイギリスの NESLi2 について紹介があり、OhioLINK では(1)電子ジャーナルファイルを買取り自前のシステムで提供している、(2)利用対象者 60 万人のうち月 10 万人が利用している、(3)比較的小規模の利用が多い(閲覧項目数は少なく閲覧時間も短い)、といった解説があった。その他に(a)電子ジャーナル利用の影響として日本、フランス、イギリス(BLDSC)では ILL 依頼件数が減少している一方で、アメリカ(ARL)では増加が見られる。(b)電子ジャーナル利用の 80%が収録タイトルの 35%によるものである(OhioLINK の例)。といった解説があった。

電子ジャーナルの評価：(1)統計指標や(2)評価指標として COUNTER、ARL E-metrics、SCONUL、ニューカッスル大学の重要パフォーマンス指標について紹介があり、(3)電子ジャーナルの利用単価は冊子体に比べ大幅に安い、といった解説があった。そして(a)評価指標は整備途上にある。(b)北米や英国では 2004 年度から全国統計が収集されつつある。(c)利用単価で電子ジャーナルを評価する傾向が出てきた。といったコメントがあった。

おおつな こういち (京都大学附属図書館)

続京大図書館史こぼれ話 第四回

京大草創期、図書館を巡って起った対立事件 その2

廣庭 基介

さらに続いて、明治 33 年 9 月 22 日には、前回と同じ京都市尊攘堂において、関西文庫協会の第 4 回例会が開催され、来賓として臨席していた岡松参太郎法科大学教授が 1 年前の明治 32 年 8 月まで 3 年間ドイツに留学していた間に見聞したドイツ、フランス、ベルギー、イタリアなどの図書

館について講演を行いました。

「欧米諸国に於ける図書館はいずれも完全なるものにして、到底我が国の比にあらざるなりとて其の重なる図書館名、建築、蔵書等の大要を挙げ、而して是等大図書館の事は是迄既に本会に於て講話もありたるを以て、氏が留学中ドイツに於て学術研究上極めて簡便にして最も利益を得たる諸大学に附属する所の図書館乃ち専門科学を修むるもの又は著述家等のために最も便利なる『プライベート、ライブラリー』に就て其の管理者、閲覧席、図書の陳列法、色別分類法、『カード』目録の記入法等其他来観者に対して注意の周到なる」ことを演説しました。演説が終わってから、欧州の事情に就いて種々有益な講話をしました。

明治33年12月9日には、附属図書館閲覧室を会場として、同協会第5回例会が42名の参加を得て開催され、来賓として招待されていた木下広次京大初代総長が演説しました。

「図書の蒐集及び保存に就いて、徳川時代に於ける図書の蒐集及び保存の方法より説き起こし旧諸藩にて設けられたる学校文庫には多くの良図書を有したりしが維新革命の際是等の書は多く散逸して今容易に之を得ることの難きは誠に遺憾なりとて殊に古文書の蒐集及び保存の必要」であると講演をして、大いに聴衆の注意を惹きました。木下総長は明治34年1月31日まで、法科大学初代学長を兼任していましたから、この当時は、他の法科教授と異なる図書館思想を持ってはいましたが、同じ法科大学教授の同僚であった訳です。

次いで明治34年3月10日には関西文庫協会の第6回例会が京都市東洞院の中央倶楽部に於いて開催され、来賓の田島錦治法科教授は次のように講演しました。

「泰西の図書館に就いて先ず英国博物館の図書館に就いて蔵書の員数、閲覧室の様、掛員の閲覧者に対する取扱方、仏国のビブリアテーク、ナショナルに就いて其の状況を述べ次に独逸国聯邦図書館に就いて国有、大学附属等の大小図書館を枚挙して其の蔵書員数、創立の起源、閲覧者の員数、経費、位置等を統計に憑りて綿密に報道せられ泰西諸国に就いては斯の如く完全なる図書館多く之を我国の現状に比すれば霄壤の異（筆者注・天地の差）あり而して之等図書館の有益なることは言を待たず国民教育と相待って今日独逸文運の隆盛なるを見ても興って力あり依って我国にても各所に多くの大小図書館を設立あらんことを望むなり」と演説しました。続いて協会員である第三高等学校の宍戸一郎教授が「古碑文鐘銘等の謄本及び図書の陳列法に憑いて自己の新案を述べ幾多の標本を示して実地応用の方法を論じましたが、この宍戸教授の子息である宍戸圭一氏は昭和17年から同46年まで京大工学部教授を勤め、就中昭和41年7月25日から同46年3月31日までは、附属図書館第11代館長に補されていました。法科教授と図書館の確執とは無関係ですが、序でなので触れておきます。

宍戸教授の談話が終わった後、懇親会に移り、宴^{たけなわ} 酬^{ひもか} となった時、来賓の一人であった井上密法科教授が飛び入りで演説を行ったことが『東壁』第一号29ページに掲載されています。その演説とは「図書に就いて氏が卓抜なる持論即ち将来の大学は当に図書館と為るべき事を述べられ」というものでした。

さて、京大附属図書館初代館長島文次郎、幹部司書秋間玖磨、同笹岡民次郎が発起人となって創設した図書館・書誌学啓蒙の研究団体である関西文庫協会に対して、法科大学教官が協力を惜しまず、何人もの教官が、同協会の例会に出席して、自分達が海外留学で得た図書館知識を披瀝してくれたことごとを紹介してきましたが、本稿第1回でも述べましたように、図書館又は図書館長に対して、法科大学教官が批判を加え、館長の罷免を要求するのは、明治35年7月のことでありましたから、その日付より前にもう一度、関西文庫協会に対して、法科教官が協力しております。それは明治34年6月9日に祇園御幸道の東山御文庫で開催された第7回例会においてです。協力し

たのは、当時法科大学講師であった湯浅吉郎^{きつろう}（号：半月）です。

（次号につづく）

ひろにわ もとすけ（元京大図書館員）

第37回全国大会のご案内

第37回全国大会は、8月5日（土）～7日（月）の日程で、
さいたま共済会館（埼玉県さいたま市）を会場に開催されます。

大会構成は以下のとおりです。

- 8月5日（土） 研究発表、分散会、全体会、懇親会
- 8月6日（日） 課題別分科会、ラウンドテーブル or 昼の自主企画、課題別分科会
- 8月7日（月） 主題別分科会

詳細は会報「大学の図書館」6月号にてご案内します。
全国大会は、年に1度、会員が集い、研究発表、情報交換、交流を行なう場です。
みなさまの積極的なご参加によって、大会を盛り上げましょう。

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2005年度（大図研会計年度2005.07 - 2006.06）に入っておりますので、2005年度の会費の納入をお願い致します。また、2004年度以前の会費を納入いただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000＋京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 dtkk@rg7.so-net.ne.jp までお願い致します。